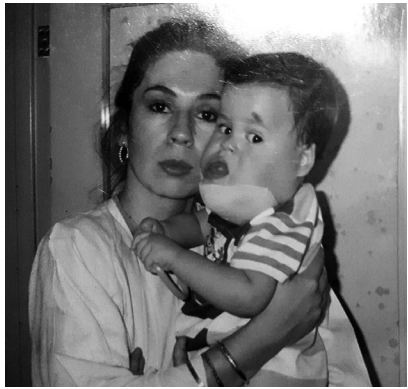


CSR「万能主義」の是非

中外「ピシバニール」の無償提供終了で困惑する患者

今から26年前の92年、メキシコ人一家が大阪国際空港に降り立った。両親と姉弟の4人家族。母親に抱きかかえられた1歳の男児は、首周りと舌が腫れ上がり、首には気管切開のチューブが挿入されていた。名前はカルロス・ペレサレスちゃん。リンパ管腫という難病の治療のための来日だった。

リンパ管腫は頬や首、脇の下などができるリンパ嚢胞で、多くは2歳までに発症。良性の腫瘍だが、発生する部位によっては気道狭窄



来日したカルロスちゃんと母親

制限を設けるようになる。1医療機関に対し、年1回の供給と上限を設けるなど、活動を縮小し始めたのだ。

また、CSR推進部への変更に伴い、荻田基金は海外からの問い合わせを一手に引き受けることになっていった。英語とスペイン語の対応はプロボノ（専門性を活かしたボランティア）で、メンバーは本業の仕事の傍ら海外対応に取り組んでおり、業務に限界があった。17年にその苦しい状況を中外に伝えると、「18年からは、窓口業務をすべて中外が行う」と言い渡された。突然の方針転換だったという。仰木氏は、「中外からこれまで任せっぱなしで申し訳なかったと謝罪された」と話す。

そこからは、一気に海外提供の終了へと進んでいった。18年1月、中外は海外提供を見直すため、ピシバニールの送付を一旦停止。荻田基金が中外から受け取っていた年間200万円の寄付金も、18年は2万円に減った。

そして、ついに中外は海外への無償提供を終了する。10月上旬、仰

で窒息する可能性もある。

カルロスちゃんの治療を引き受けたのは、京都府立医科大学の小児科医師の荻田修平氏。中外製薬の「ピシバニール」がリンパ管腫に効くことを論文で発表した医師だった。カルロスちゃんの父親はその論文を読んで、来日を決めた。一家は滞在費や治療費のため、

家や車を売り払っていた。荻田医師はこれを知り、「カルロスちゃん基金」を立ち上げ、募金を呼びかける。当時の報道によると650万円が集まったという。

カルロスちゃん基金は、一家が帰国した後も、海外に住む患者を支援するために続いた。03年に荻田医師が亡くなってからも、団体名を「荻田修平基金」（現在はリンパ管腫と共に歩む会）に改め、引き継がれていた。中外の協力のもと、ピシバニールは無償で海外に送付され、患者は自国で治療を

受けられるようになっていった。

しかし、今年10月、中外はこの海外提供の終了を決定。発表を受け、ピシバニールを待ち望んでいた海外の患者や医師から、さっそく再開を願う声が上がっている。

3年前から関係に変化

ピシバニールは75年発売の古い薬で、もともとはがん治療薬として開発された。溶連菌をペニシリン処理し、凍結乾燥させた製剤で、免疫賦活剤として用いられた。最盛期は300億円以上を売上げ、中外の「ドル箱」となった製品だ。日本でリンパ管腫への適応は95年に取得。添付文書の臨床成績には、投与6ヵ月後で有効率は85・4%と記載されている。中外は海外の承認を得ようとグローバル開発にも着手したが、09年になぜか中断した。中外は詳細な理由を明

木氏ら荻田基金のメンバーは、中外からこう説明されたという。「ピシバニールのグローバル開発は今後も行わないことを正式に決定した。グローバル開発をしない製品を継続的に提供し続けることは、各国のコンパシヨネット・ユース（CU）制度の趣旨に沿わなくなり、コンプライアンス（法令順守）違反になる」

「製薬企業として自殺行為」

中外CSR推進部の加藤正人副部長に、今回の終了について改めて話を聞いた。すると、同じような回答が返ってきた。

「何か指摘があったわけではなく、グローバル開発の中止によって、CU制度に沿わなくなった。非常に残念だが、企業としてはコンプライアンスを重視せざるを得ない」とはいえ、人道的見地から例外措置を取ってもらえる可能性もありそうだ。実際に、各国の規制当局と協議したのか尋ねた。

「そこまではしていない。各国の規制を見たうえで判断」

かしていないが、「有効性に関わるものではない」という。

ただ、開発は中断したものの、海外への無償提供は脈々と続けてきた。荻田基金は主に、海外からの問い合わせ窓口を担当し、中外の活動を支えてきた。

この荻田基金でスペイン語対応をしていたのが、理事兼事務局長の仰木みどり氏だった。カルロスちゃん一家訪問の際、スペイン語通訳をした。仰木氏は当時大学生で、「西語研究会」を通じ、ボランティアとして協力。荻田医師が亡くなる前に「理事になってくれへんか」と頼まれ、快諾した。

「患者さんの苦しみを身をもって知り、平等に治療を受けられるよう使命感を持って取り組んできた」。しかし、二人三脚で歩んでいた荻田基金と中外だが、15年頃から足並みが揃わなくなる。ちょうど、中外の担当部署がこれまでの海外営業推進部から、CSR推進部へと変わったタイミングだった。

「ピシバニールの年間供給量を設定する」

16年に入り、中外は海外提供に

を務めた一般社団法人環境金融研究機構の藤井良広代表理事は、次のように問題視する。

「製薬企業の社会的責任のひとつに『医薬品へのアクセスビリティ』がある。ピシバニールは中外しか製造できないのに、自らその責任を放棄した。これは製薬企業として自殺行為で、ブランドが大きく傷つくだろう。むしろ中外は、ピシバニールの活動を世間にアピールすることで、ブランド力を高めるチャンスがあったと気付くべき」

CSR活動をうまく機能させるにはどうしたらいいのか。「CSRを業務として考えてしまうと、予算の範囲の仕事になってしまう。CSRは企業価値に直結したものであり、会社のブランドを左右する。その意味で、経営戦略の中で取り組むべきものだ」

仰木氏のもとには、海外の患者からピシバニールを待ち望むメールが届いている。フィリピンの患者家族から届いたメールの一文には、こう綴ってある。

「どうか私の赤ちゃんを助けてください。命を救ってください」